

催眠を学んで人生の花ひらく

稲垣シズエ



A 男の思い出

辺地勤務を終え平場の小学校に勤務したその時、38人の3年生の児童の引き継ぎを前担任から受けた。その時30代後半の私の血潮が動いた。

『このA男は馬鹿で話しにならない。どんなによく教えても覚えられない。母親もA男の名前を漢字で書くことができない。遠足の時は、A男が好きなバナナを持ってこさせないようにして欲しい。ウンチたれて大変だったんだから。どうにもならない母子です』

A男は確かに学力は送れていた。友人もなく、学級の子どもはまともに相手にしていない様子であった。しかし、A男はととても素直で、まじめに作業する。運動会前のグラウンドの草取りで、教師がその場を離れると、他の児童は、さぼったり、のろのろしていてもA男は、汗だくで顔を真っ赤にして草を取り、指定された場所へ捨ててくる。母親は口数が少なく劣等感が強いように見えた。しかし、瞳はきれいで、私と話すときは私の顔をよく見て話を聴いた。そしてなれてくると、美しいほほ笑みを見せてくれた。幸せなことに、この学級を私は4年間担任し卒業させることができた。

3年生の後半から、A男は必要なことは話せるようになり、掃除の班長も立派にこなせた。A男は自分から他の児童に話しかけることもできるようになった。そして、人前で歌うこともできるようになった。A男が始めて教室で歌ったとき、学級の子どもたちは目を丸くし互いに抱き合っ『A男が歌った、歌った、歌った』とジャンプして喜んだ。あの光景は生涯私の脳裏から離れない。そしてこの思い出は私の宝物となった。

月日が経つにつれて、母親も、落ち着いた笑顔のある母親になり、心配ごと等は自ら相談してくれるようになり、PTA活動もよくやってくれるように変容していった。この母子とのめぐり逢いで、私は一層必要感を増した深層心理研修に没入していった。

バラバラな学級が

当時の学級はバラバラになっており、まとまりのつかないように思えたが、二学期頃からその心配は覆されていった。お帰りの時の『今日の反省』は全校でやっていた。私の学級はその後で腹式呼吸をし、正坐することを日課とした。最初はあまりいい顔をしない子どもたちが5～6人いた。しかし日が経つにつれて、みんないい顔になって実施した。私が出張の折も、学級委員が先頭になって実施した。『正坐しないと落ちつかねえよ、先生はやく正坐しようよ』と子どもたちが言うようになっていった。私は正坐している子どもたちに向けて、生活の中から適切な啓発文を選んで、くり返しインプットしていった。人を差別してはいけない、命の尊さ、相手の立場になって考える、産んで育ててもらっているありがたさ……等々

暑い日の5時間目はうとうとし、だるくて腹一杯で、ねむい。教室のすぐ下がプールで、他学年のにぎやかな声がする。そんな授業時間に、集団催眠に誘導し、その後、本時の

授業の重点をしっかりと教える。

『目を開けた時、今教えたことはしっかり脳裏に印刷されている』と暗示し、『よーし、ねよう、安心してねなさい、時間がきたら起こしてやる、みんな眠れ〜』

テストではよい結果が得られ、いい成績が残った。その時は分からなかったけど、すでにピグマリオン教育をやっていたのかなあと後から思っている。彼らの卒業とともに私も他の町へ転勤した。

催眠の勉強開始

山口先生の下で、本気を出して催眠の勉強を始めたのが昭和47年頃であったと思う。その頃はよく、飯能（山口先生の自宅）が研修会場になった。飯能祭りの花火も窓から見えて楽しんだ。キノコの話（山口先生の研究分野の一つ）もたくさん聞き、現物を見せてもらったことを覚えている。しばらくして研修会場は“神田パンセ”へ移った。当時、新潟から参加しておられた故渡辺稔先生ともはじめて出会った。

昭和57年、私は教育現場を離れ、横浜国立大学で障害児教育を学んだ。現場へ戻り、『ニイガタ深層心理研究会』（渡辺先生が立ち上げられた会）へ、ほとんど欠かさず参加し、理論、実技、事例に積極的に取り組んだ。昭和57年深層心理技法2級、59年1級及び『ニイガタ深層心理研究会』の指導講師の資格をいただいた。中央から山口先生、千葉先生、小林先生等がこられ、催眠の理論と技法を教えて下さった。新潟の会は平日の夜間も行われ、私は勤務終了後、車で約1時間運転して、夜7時～9時までの研修に参加した。平均25～6名の参加者で、会社員や主婦、僧侶などが参加されていた。昭和60年、深層心理技法1級、当会の指導講師の資格を山口彰先生から頂くことができた。

校長からの注意

その少し前、昭和55年頃から、私は勤務校で車酔いや、夜尿の相談にのり、催眠をも取り入れて治療指導をした。そしたら校長に呼び出され、厳重注意を受けた。ようするに催眠などおかしいものは、人をだますような理由（わけ）の分からないものは、学校でやってはならないということであった。しかし、私は子どもやの要望に添い、それなりの結果を出していった。しかし校長の考えは固く、自宅で実施せざるを得なかった。

昭和60年、私はY市の小学校へ転勤した。その年、私は言語教育部門、個人の部で博報賞を受賞した。そして私は放課後、前任校でやったように催眠をも必要によっては駆使し、教育相談を実施した。再び校長に注意されるかも知れないことは承知の上でやっていた。教育相談は校区外からも受けた。しかし幸いなことに当校では校長に呼び出されることなくこの学校での勤務を終えた。

満開の時代

平成4年、私は最後の勤務校（定年）へ転勤した。当校で私の教員生活の花が満開になった。私は校長室へ呼ばれた。『あなたの研修してきた技能を思い切り使って、あなたの思うように、あなたの好きなように仕事をしなさい。校長の私が全責任を負う。そしてこのことは、私から全職員に話し、理解と協力を得る』と想像もしていない校長の言葉をいただいた。放課後は、車酔い、夜尿、吃音、不登校など、他校の子どもや保護者の指導も、

させてもらえた。保護者だけでなく、教員の相談もさせてもらった。それなりの結果を得ることができた。

教職経験約40年、退職後、O市教育アドバイザー、県のスクールカウンセラー、派遣カウンセラー、そして、自宅で教育相談室を開設し、現在に至っている。催眠を知り、実践し、大勢の先生方や、仲間に支えられ今を生かさせてもらっている。ありがたく感謝の念でいっぱいである。

残念なことも

ただ一つ残念なことがある。半年以上不登校の女子高生が、両親に連れられて相談に来た。彼女は精神科へかかり投薬を受けていた。自宅へ3回ほど訪問し、私の相談室へ2回来室してもらった。しばらく彼女は家族と口をきかなかったが、私と会話ができた。面談を続ける中で、やがて母親ともしゃべるようになった。しばらく風呂へ入らなかったが、風呂へも入るようになった。私は彼女の好きなぬいぐるみ(兎)などを話題にしたり、窓から見える景色を話題にしたりして面談を進めていった。彼女はポツリっと単語で返すだけだったが、彼女とは約20分ほど付き合い、後は母親指導に当たった。面談を始めて約一ヶ月後ぐらい過ぎた頃に、彼女は登校すると言い出し、その準備をしている様子を電話で母親から聞いた。母親は喜んでいたが、私は喜んでいいが彼女から今まで通り目を離さないで欲しいことを頼んだ。

一週間後、彼女は自殺した。私は両親に頼まれて葬儀に出た。彼女の学校から教頭と担任が来られ、私に礼の言葉を言われた。しかし、当時私が勤務していた学校では催眠の理解がなく、学校での使用はいけないこととされていた。予想はできたのだが「催眠をかけて殺したのではないか？」というささやきが職場にあることを同僚から聞いた。私は毅然としていた。校長も何も言わなかった。しかし、私は苦しかった。このことを山口彰先生に報告した「必要があるならいつでも新潟へ行くよ・・・。」とっていただいた。私は催眠の勉強をやめようとは思わなかった。ますます深く勉強していきたいと思った。この事例では必要がなかったのが催眠は使っていなかったのだ。当時同僚たちの間では、私の前では現わさないが、私や催眠についてよくない方向でささやかれていたと思う。私は、私を支えて下さった山口先生や深層心理研究会のみなさんに申し訳ないと思った。そしてあらためて決意した。勉強を深め、これからいい結果を出して、このささやきを吹き飛ばしていかなければならないと。

私も人生終盤にきている。そして催眠を学ぶことができたことをとても喜んでる。皆様に感謝したい。

平成24年 7月 合掌